

■美唄空港フライイン記

箱崎 順之

日本のGA環境を冬型の気圧配置に準（なぞら）えて、「西高東低だ」と言われる事がある。つまり、GA機が自由に離着陸できる飛行場の数が、西日本には多く東には少ない、という気圧配置に例えたものだ。実際、GA機が計器・離着陸ができる空港ともなれば、悲しいかな関東には皆無である。

一方で気を取り直して北に目を向けると、こちらは北高南低とも言える傾度を持ち、みちのくから蝦夷地へと、有り難い環境が広がり始める。つまり関東が一番GAにとっての低気圧地帯なのかもしれない。

そんな関東に愛想を尽かしたかどうかは知らないが、ドイツ生まれの飛行機野郎が、ついに北海道にGAパイロットの牙城、マイハンガーを作ってしまったという。

北海道を根城とするAOPAの先達としては、別海フライトパークの小六会員、新得農道空港の志摩会員が思い浮かぶ。

だが、このゲルマンの戦士は法律や慣例の壁など波いる障害を物ともせず徒手空拳立ち向かい、ついに美唄にGAの聖地を開拓してしまったのだ。彼の情熱とパワーには、屯田兵も驚くに違はなく、ニッポンのサムライもかたなしだ。

そんなP.スティーガー氏の元へ、物見遊山で行ってみようという会員機が10機あまり集まり、フライインを行うことになった。

招待された場所は北海道美唄（びばい）市にある通称美唄農道空港。富良野が北海道のヘソであるならば、美唄（びばい）市はヘソの脇、ビミョーなロケーションだ。

8月6日。仰せ付かったマーシャラー任務のため、筆者は早めに丘珠空港を離陸し石狩川を溯行するように飛ぶこと約10分、石狩川流域に無数点在する特徴的な三日月湖の向こうに、かの地美唄農道空港が見えてきた。

農道空港があるあたりは茶志内（チャシナイ）と呼ばれ、アイヌ語で「崖の多い川」という意味らしい。ドイツから来た飛行機野郎は、そんなかつての石狩川支流の大地に、故郷ライン川のローレライを重ね合わせて思い浮かべたかも知れない。

スティーガー氏がマイクを握るフライトサービスに導かれ、長さ800mの長い滑走路に降り立つと、そこには絵になる風景が待っていた。

小さな管理棟のそばには小型機2機が格納出来るという、氏の所有するハンガー。その中には小型単発機がひっそりと乗り手を待っている。

CABも气象台もない。だがGAはこれでいい。ここは、氏の日常と訪れる我々の非日常のまん中の世界。美唄は紛れもなくジェネアビの天国であり、聖地なのだと感じた。

やがて何機もの会員機が到着、炎天下での慣れないマーシャルも、夜のビールを美味しくする思い出となる。

ATCやプランクローズ、畑仲さんと共に忙しくメンバーを迎え入れるスティーガー氏の回りで、再会し語り合うパイロットたちの笑顔、笑顔、笑顔。美唄市始まって以来のイベントに、市の職員の方、派出所のおまわりさん、どこの誰か分からないおじさんが石狩鍋の具のようになっている。

ここがGA天国ならば、舞い降りてきた我々は天使なんじゃないかい？（北海道弁）。

何か大きな目標を追いかける人には、同時に大きな優しさが溢れている。

パイロットの夢を手に入れるまで漕ぎ着けたのは、氏のもつ運やエネルギーだけではないのだな、と感じた。

だが夢見たものを手に入れた氏も、今まだようやくスタート地点だと目を細める。

北の大地は、これから良い季節を迎える。

今回フライインに参加できなかった諸兄も、少し足を延ばして、北北東に針路を取ってみてはどうだろうか。

フライインに至るまで、氏に全面協力して下さった美唄市のこと、8月から増え始めるアブの羽をもぎって遊んでしまう濱谷会員のこと、安価に泊まれる良質の温泉があること、AOPAの成吉思汗（ジンギスカン）宴会が盛り上がったこと、そして、みんなが飛び立って行ってしまった後、ほんの少しの寂寥感を感じただろうスティーガー氏が、また皆を待っていることは、誌面の関係で機会をあらためて記すことにする。